

紙屋町等へ入ると、川は浮流木はもたして人や馬や牛の死骸が
 入ったに脹水あつて縁おんでいふ。焼けた崩れを家屋の下に遺体
 と発見した。腐乱して紫色に腫れあつていふ。収容するに作
 と觸れ出すと「スレリ」と聲かむけけ。思ひ不念守に冥福を祈る。

正に遠慮程才りな阿鼻叫喚の地獄絵である。
 その後数日して部隊は海田平に集結。静園を越えて近海の島に
 前急要員として転進するのちと満ち満ちた。8月15日正午に重厚な
 放送かあつていふ三と下待期。よく聞き取れぬか、左が天皇陛下の終戦
 の放送であつた。とつと戦争か終つたと思つた。

後とつて、自分が類死の重傷を負ひながら果てた。乳を飲ませ
 へて家裏と親率を見せ。最前市下で撮影された写真「岩瀬の川魚番を待つ
 母子」。母は生愛の崇高な姿に目をやり接して唯唯頷く下が思ひつた。
 復員して聞かされた頃は、広島駅を通過して岩瀬に到着して果てた。
 以て報道かあり、読報（左）か心配をたつた。自軍を沈没はたかたか
 定期検査での白血球の増減に一喜一憂。結果に果しては岸に
 子供が生き残つたかどかか人知れず、随分人面でもし憫みにもせぬ。
 年々娘二人は健康。其男は一人子孫が握かり、成人一人前の社会
 人として活躍してゐる。

今日まで健康診断は使はず。健康管理は、自衛隊の健康をたもつて
 神位のご保護が、私自身二の三日目まで迎へた。二つと二つと
 さして下さる二つと万期に感謝する。其上、偉大な力にあつた。謝恩の書生を
 送りだして思つた。

七く行ふ此の二つと。今尚聞新と話をさして、二つと二つと
 其の二つと快癒を祈り続けます。

寧ろ年々下り、世人道徳の核を奪ひ、屍體を散らす人の人徳を
 園地の悲願を無視して、緋色を散らす。核を奪ひ、行つた。二つと
 祈賜の思ひつた。

平成20年5月5日

将軍忠義

将軍忠義

平成17年8月5日 和歌山工ネス工協会「平和の鐘打鐘会」
のとき私のしほ挨拶もお話します。

和歌山工ネス工協会は毎年8月5日を「争い討ち日」と定めて
「せめて今日1日1年いとも平ん(平)しつ之の運動を進めていませす。
内容はこの戦没者の冥福を祈って正午の時報を合図に1分間の
黙禱を捧げます。この世界の平和を祈念して各地に平和の鐘を鳴らす
です。

この時と集まってきた方には何れも何か簡単なお話をするこにしていませす
全国の原爆の体験談をと思つていませ(左)と三つが表す9日NHK
テレビ午後9時から「赤い背中」(原爆を背負い続けられた60年)と題して、
長崎工原爆150年を象徴(16才)という方の今日に至る生活体験
を紹介する番組がありました。皆さんの中このテレビをご覧の方には
方がお立ち下さると思ひます。放送の粗筋をお話します。

谷口さんには16才のとき原爆1才です。
自転車で走行中突然熱気と爆風で背中から自転車をどくと
道路のどけりけりまじませ。顔を上上げる周回をいませ左に膝肩の
とへの能はささいませ。背中の手をやると物をどるとませ(左)左手
の皮膚が月朧か左年の先平不熱気とでまかれて熱水下こませませ。
先ずいませ人の足が皮膚を切つてまじませ。機械油をどくとませませ。
背中が焼けて鼻血がまじませ。痛みを感にませ人、焼けて焼け
(体の組織の一部が死物(三才)の状態にまじませませ。

3日後は植髪所にまじませませ。
尻の両側から背中まで肉が腐り工臭い肉の焼けたまじませ。
どけりまじませ。腐った肉の喰い入る激痛。まじませ。焼木着を押しませ
まじませ。まじませ。痛みを感にませませ。

俯てのまじませ。身動きを一つもまじませ。膝にまじませ。何回も叫びませ。
熱線・放射線が皮膚を通り工内から骨の達し。遺体子にまじませ
まじませ。骨のどけり。皮膚の再生能力を奪い、最先端の医療をまじませ
まじませませませ。

我々が被爆者の一人であるが、私たちがこれだけ鼻操の恐ろしさを話しては
 谷田さんが生活体験を通じて教えたことを叫ぶのは、新しいこともあつた
 心とともいふ。自分たちが目の肥えた心で理解出来る事や平日的に人間
 の尊厳をいふこと。

谷田さんのお言葉を借りてお中けておきたいが、核兵器を為元出
 した者は人間、それを出した者も人間、この核人道的な核兵器を
 使った人間も人間。

今度は核を使つた戦争が起るといふ男とていふせんが、僕らの起つた
 としたら、おまは生かすべしと減、この美しい地球が塵埃と
 化してしまふ。

岸二は世界の指導者(特に核保有国)が広島喜望崎(島根)直心
 小出ともなごの、東京の算中の一挙にけいがかやいかにしてせめて
 核廃絶の白く道筋をけいこつておらう。

最後の核廃絶は下り霊長人間であつてほしい。

平成26年5月8日

藤本忠義

入市による被爆体験

三原市西野

菟山正男

平素から広島に住んでいて、運よく8月6日市外にいたため助かった人、平素よそに住んでいる人が運悪く当日入市して亡くなった人、皆、それぞれ持って生まれた運命だろうと私は思っている。

幸い私は、前者、運の良い方で、こうして生きているのだから余程生き運があったのだろうと、今でも時々當時を思いだす。

当時、私は16歳、旧国有鉄道、広島第一機関区に機関助手として勤務、下宿は西蟹屋町（広島駅から歩いて15分位）で下宿していた。

丁度8月6日の前日が、公休日で三原の実家に帰っていた。6日当日、出勤日で朝9時頃の下り列車に乗るため三原駅へ向かった。（後から聞いた家族の話では、私が家を出るころ西の空がピカツと光ったと言っていたが、それが原爆投下の閃光だったと後からわかる）

下り列車は、順調に走り西条駅に到着したが、そこからは全く動かなくなった。西条駅からは広島がやられた、全滅した等情報が流れ、皆一斉に緊張したが、やるすべも無く待ち続けるしかなかった。

午後になって何時頃だったろうか、列車は少しづつ動きだし、何度も止まったり動いたりしながら海田市駅にたどり着いた。そこから先は列車が行けないと言うことで、全員列車から降り歩き始めた。線路添いの道を、皆が西方向に歩きだしたわけだが、前方から行列になって切れ目なく歩いて来る人々に出会い、驚きと緊張感で身震いする思いであった。

眼は破れ、髪を振り乱した恐ろしい形相、体中火傷のような、傷のような異様な姿で、皆、東方向に歩いていた。靴は履いていたのかどうか覚えてないが、おそろく裸足で歩いていたらいたんだろうと思える。

今考えると、こうして自力で歩いていた人はまだまじな方で、命の助かった人も結構いたんだろうと思う。

このような状況は、広島に近づく程ひどくなり、私は途中から線路伝いに歩きながら広島駅に近い西蟹屋町の下宿に先ず向かった。

下宿屋の近くでは、家屋の崩壊で道路が一杯にふさがり歩けない状態、又数軒先まで火災で火の手が追っており、下宿屋の二階に上がろうとすも、家屋が半壊で中々上がれない、下宿先の■■■や、同室で一緒に下宿していた機関士の■■■氏も居合わせ、力を合わせ何とか二階に上がり荷物を道路に投げ落とした。

下宿先の■■■の荷物も、手伝って持ち出すのがせい一杯であった。火の手がすぐ近くまで来ていたので気が気でなく焦りと緊張で全く正常な精神状態では無かったと今思い出している。

下宿先の■■■(■■■様)は、その場で別れて以来お互い音信不通、今もって不明である。

同室で一緒に下宿していた機関士の■■■氏もその日、別れて以来お互い会った事はない。

(その■■■氏は、その後、昭和44年7月に私が被爆者健康手帳を貰う手続きのとき、J R広島運輸所で所在を調べて貰うと、四国宇和島の機関区に勤務していることが判明、お互いの無事を確かめ合ったり、保証人になって貰うなどの経緯があった)

私は、下宿屋から皆と別れ、僅かな身の回り品を持ってその足で機関区へ出勤した。

幸い機関区の建物は大きく壊れているとは思わなかったが、怪我等でござった返していた。私の友人(■氏)は頭に少し怪我をしてしたが、たいした事でなく、お互いの無事を喜び合ったりした。

当日、広島駅は崩壊で列車は全部止まっていたが、広島操車場から出る上りの貨物列車は、出発可能で乗務することになった。然し、機関車に積み込む石炭と水は補給出来ない状態で、瀬野機関区まで機関車だけを回送、補充して帰り糸崎まで運行した。

今から考えると、原爆投下の当日、あの大混乱の中で貨物列車だけでも運行出来たことを不思議に思っている。

以後、広島の下宿先は無くなり、三原の自宅から通勤しながら乗務勤務を続けた。広島駅付近の建物は壊滅、見渡す限り瓦礫しか残っていない町の中を、遺体があちこちそのまま残っていた。その横を歩き交う人々は、皆、無表情で通り過ぎていたのが今でも強く目に浮かぶ。

その後、終戦の末期には、岩国駅構内が空襲により蜂の巣のように穴があき、機関車や貨車が横倒しとなった。早速機関車に復旧用車両を連結救援に行き、貨車の中で寝泊りしながら復旧作業をした。

また、徒歩連絡のため構内を歩いている人々の中には、若い軍人が戦争はまだ負けてない、我々は戦うんだと狂ったように叫んでいた姿、既に戦争は終わったと言う情報も流れており、駅構内は騒然とした異様な空気であった。

あれから 58 年、広島は復興したが、世界の情勢はまだまだ不安だらけ、心配の種は消えそうにない。

あの悲惨な戦争、あの広島悲劇、二度と起こさせない。
被爆者の一人として心からそう願わずにはいられない。

広島市の被爆体験記

私は、芸北の山、雲月山の麓で、北広島町土橋で、昭和5年[]に生まれ、今年84才の前山和彦と申します。昭和20年に、15才で、広島鉄道管理局 広島車電区に就職し、作業をしていました。

職場へは、広島駅構内の広島車電区に勤務し、寄宿舎は、広島駅より2キロ離れた尾長町にあり、徒歩で15分位の所でした。一通りの研修を受け、作業をして居ました。

昭和20年8月6日、原爆投下の日です。私は、非番日で休みの日で、寮で、同僚を送り出して、布団の上でゆっくりと休んでいました。

その時、朝8時15分突然1瞬、青い閃光と同時に、百雷が1時に落ちたかと思う様な、大音響がしました。ここまでは覚えております。

どれだけ時間が、経ったかわかりませんが、気がついてみると、部屋の真ん中に寝ていたはずの体が、部屋の出口の壁まで吹きつきられて、窓ガラスは全部「コナゴナ」に吹き飛び、壁土も落ち、屋根もめくもりがあり、1瞬の内に、破壊された変わり様に、震えが、しばらく止まりませんでした。

まず外の様子を調べる為、出ようとしたところ、暑いので上半身裸で、休んで居たため、此の儘では逃げられない為、押し入れを探して上衣をきて外に出ました。尾長寮の屋根は、爆風でめくれがあり、何事があったかわかりません。恐ろしいばかりで、動悸が高くなります。人影もなく、寮は、やや高い位置にある為、広島市街を見降ろせば、殆どの家が破壊され、ひどく倒れていました。

大変な事になったと思い、此の儘では、何時又爆弾が落ちるやも知れず、何処かに逃げる事を決め、寮内に這入ろうとしたが、廊下はガラスの破片で足の踏み場もありまん。

止む無く、迂回して窓よりよじ登り、寮内にはいり、よく見ると手や足、脇の下等を負傷していました。仮治療をして貴重品をリュックサックにいれ、身支度をして外に出ました。

改めて、広島市街を眺めると、建物は倒壊、樹木は引き飛び、一瞬の内に変わり果てた様相に、もう一度目を探り、よく見ると、煙が立ち始めたところ、又

火も手も上がり始めていました。

尾長寮は、双葉山の麓にありましたので今後の危険を避ける為、1先ず山に避難することを考え山に登り始めました。午前9時過ぎだった様に思いますが、山道に差し掛かった時、下の町から、ぞろぞろと沢山のひと達が、山に登って来ました。屋外で被爆した人達でしょう。

肌に就けている服が黒い部分は焼けて亡くなり、白地の部分だけが、少し残りぼろぼろです。又頭髮は焼けただけ、髪が逆立ちしたものの、顔や手や足の露出した部分は、黒く焼け、腫れあがっていて、男女の区別がつきません。全くあわれな姿に、声も出ず、「よぼよぼ」と1歩1歩足どりも重く、山に向かっ

て歩いて行きました。

山の八合目位の所まで登り、木の根元に腰をおろし、広島市街を眺めれば何でこの様な状態になったのか、と心配になりました。昼前だったでしょうが、強い雨が降って、後に放射能を含んだ「黒い雨」だと聞いていた様に思います。

だんだんと山に避難する人も多くなり、はだしの人、既に道端で息が途絶えた人、うめき声、水を求める人、全く生地獄です。どうすることも出来ず手のつけようがありません。ただ声をかけ励ますくらいのことしかできませんでした。時も立ち雨も止み、午後3時頃だったでしょうか、空腹を感じ職場も気にな

るので、療まで降りて見ることにして、居り始めました。

尾長の寮は、1部、屋根は飛んだものの、倒壊はせず、私は、倒壊建物の下敷きにもならず、また直射被爆もなく、元気な部類に属する事ができました。

帰ってみると、寮は、仮の診療所となっており、鉄道病院の先生が来て皆さんの火傷の治療をしておられ、治療と言っても、種油の様な物をぬって貰うだけです。

寮に帰って「ウロウロ」していたら、隣の部屋の同僚、君に出会う事が出来、お互いに元気をだして頑張ることにしました。夕刻5時頃、さんの指揮の元に、炊き出しが始まり、むすびを2個ずつ配られ、やや元気を取り戻しました。

日役間際になり、■君と相談し、今晚は山へ避難することにしました。屋間より、まだひどい状態になっていました。うめき声、子供の泣き声、息絶えた人も多くなって居ました。

広島市街の空は、炎につつまれ、時々大きな音で、何かが破裂していたようでした。1晩中蚊にさされながら、■君と2人で時を過ごしました。また腹がへり明日からどうなることか、不安が1杯です。でも瘻が残って居るだけでも良しとしなければと、2人でいろいろ語る内に夜が明けました。

8月7日療に帰って見ると、昨夜の火災は、寮まで押し寄せて、皆で努力で、消火に成功し類焼はまぬがれた模様で、私達は山に逃げていて申し訳なく、■■さんに謝りました。

■君と2人で、広島駅に行くべくでかけましたが、足の踏み場もなくでられませんが、止む無く■■さんの指揮に従い、寮内の整理をしました。

8月8日、今日は東練兵場の方を迂回して、駅に行くことにして、■君と2人で出発しました。途中まだ火が燃えている所もあり、危険な場所も数々ありました。息絶えた人、川に浮かんでいる人、馬の腹が真ん丸にふくれ上がりに上に向けて倒れて死んでおり全く生き地獄です。悪臭ももう馴れてしまいがちにならなくなりました。

広島駅に来て見ると、事務所は倒壊していて、手の付け様ありません。又、職場の最高幹部である、■■さんの、御逝去の報に、驚きと悲しみでしばし嘸然としました。同僚も3人程亡くなっていました。

8月9日、事務所の片づけをし、10日は■■さんの葬式です。大八車に御遺体に乗せて、暑い中を同僚と共に、中山峠辺りまで行き、火葬にして、お骨を御仏前に供えて帰りました。

以上、昭和20年8月6日～7日～8日～9日～10日の、5日間の状況記しました。どうぞ、戦争のない、核のない平和であることを願い、御礼を申し上げ終わりたいします。

1945年(昭和20年)、母は原爆投下の1週間前に建物疎開で住み慣れた国泰寺(爆心地から1.2km)から千田町(同1.5km)に引っ越しました。8月6日の朝、祖父を送り出してはたきをかけようとした瞬間、あの強烈な閃光を浴びて被爆。どのくらいだったのか…。気が付けば「まあちゃ〜ん」と繰り返し呼ぶ祖母の声、あたりは真っ黒いほこり。どうやら母は倒れた柱と柱の間で、気を失っていたようです。「おかあさ〜ん」「まあちゃん、生きていますの!」と呼び合い、明るいうほうへ必死で進みながら外に出ました。親子手に手を取って、倒壊し吹き飛ばされた家々で道なき道を何とか大きな往來へ出ました。そこで二人が目にしたのは想像を絶する光景でした。全身やけどで皮膚ははずむむげ、目は飛び出し唇は腫れあがり髪はちりちりに逆立っている人々が、気が狂ったようにタッタタッタとやたら走っていて、母が腕に巻いていた白い手ぬぐいは走る人にアッという間にかすめ取られてしまいました。奇跡的に祖母には火傷も傷もありませんでしたが、母の首や手にはガラスが刺さり手からは白い骨が見えていました。二人は直前に出かけた祖父が、きつと御幸橋の電停あたりにはいるはずだと探しました。電停から日赤の前を通り、広電車庫あたりまで行ったり来たり探しても祖父は見つかりませんでした。そのうち、炊き出しの白い割蒸着を着た婦人からおにぎりをもらいました。周囲にいっぱい死体や火傷のにおいが強くとても口にはできませんでしたが、母は血まみれの傷を洗うため、御幸橋のたもとから川へ降りました。川はおなかパンパンに膨れて死んだ人たちがプカプカ浮かび、水を求めて川へ落ちる人もいて、隙間もないほどでしたが、母はそれらを押しつけて手や首のガラス片が出ました。倒れた家々には火が迫り、をすすぎました。髪からはたくさんのガラス片が出ました。子供の声を聞きながら逃げ下敷きになった人々が助けを叫び求めています。子供の声を聞きながら逃げ下敷きになった親の中には気のふれた人もいました。すべては地獄絵の街と化していました。夕方となり夏の長い日も暮れようとすると、警護団の人たちが住んでいた家あたりにロブを張り始めました。ふと見るとすすけて黒い男の人が呆然と立っています。「政子!・まさか、お父さん?」変わり果てた姿は祖父でした。祖父は電停で電車を待っていて、背中に閃光を浴びました。秒速840mと言われる爆風に吹き飛ばされて、倒壊した建物の下敷きになったのです。呼べど叫べど助ける人はなく、警護団の人があたりを探しているのがわかっても周りの喧騒で気づいてももらえず、やっと夕方になって助け出されたのです。背中は火傷でずるむげ、その上たくさんのガラスや木っ端が突き刺さっていました。頬には五寸釘が刺さり、抜くとすでに化膿した傷口からタラーッと驚くほど多量の膿が流れ落ちたので、細い棒きれに布を巻いて傷口に差し込み、膿を掻きとったといひます。薬も消毒もない、8月の強い日差しが1日で化膿をひどくしたのでしょう。その日から祖父は終生あおむけに眠ることができませんでした。それから母たちは爆心地近くで、縁側に横になって腕枕をしていてる人が縁側ごと白い灰になってその

※この文章は、母親である三浦政子さんの体験談を武田豊子さんが聞き取って書かれたものです。

まんま地面に落ちているのを見ました。又電車通りに馬があおむけに倒れ、おじさんがのこざりて黒焦げの肉をひいているのも。又炎天下川岸の並木はほとんど焼け焦げて強い日差しを遮る影さえないと、無数の死傷者が丸太のごとく並べられています。そばを通ると死んでいると思つた人の白目がかすかに動くことがあります。「まだ生きていると思つたと思います。全身やけどでどけない恰好で座る女性の局部にはうじが湧いていたとも。日赤の前では焦げた材木を井桁に積み、その上に黒焦げの遺体を重ねて灯油をぶっかけては焼いています。ゴーツというすすまじい音を立て火柱となった炎が遺体を包みましたが、そう簡単には骨とはならなかつたそうです。来る日も来る日もその光景は続きました。その臭いのすさまじさはまるで地獄の様に耐えがたかつたけれど、神経がパニックを起こして何も感じなくなつていたと母は振り返ります。人々は新型爆弾らしいといい、その非人道的なむごい有様に互いに「やつたりしましようでえ！」と恨みと怒りを募らせるのでした。被爆後数日たつと、若い女性は米軍にレイプされる恐れがあるのも市内から出るようにとのお達しがあつて、祖父母と母は途方にくれながらもなすすべなく、焼け残つたトタン板に住所と3人の名前を書いて立て、御幸橋袂の土手で野宿生活をしていました。そのころ、大竹(広島から3~40km)に住んでいた伯父は、8月6日の後、大竹までひどいやけどを負つて裸同然の人たちが命がけでぞろぞろやってくるのを見て、広島にただならぬことが起きているのを知りました。警察署の入り口に3段くらい大きな階段があり、そこでけがをした人たちのためにあつたけのお灸を施し、3日3晩寝ずの看病をしたといいます。伯父は、母たちのことが心配で、焼け野原で大混乱の広島市に入り、トタンに書いた名前で母たちを見つけてくれました。3人の様子ではとても列車に乗ることはできないと、取って返してバタンコを差し向けてくれました。母たちは着の身着のままその小さなバタンコに乗り込みました。途中宮島対岸の大野のチヂヤスのあたりであの玉音放送を聞きました。それはちようど終戦の日、8月15日だったので。「耐えがたきを耐え、忍びがたきをしのび・」の声以外はよく聞き取れなかつたそうです。

大竹に入ったものの部屋を貸してくれる家はなかなか見つかりませんでした。みな親戚を預かるからとか、家族が復員して帰ってくるからとかいう理由で、やつと通されたとしても長く落ち着けるところはなく、転々としなければならなかつたといひます。これには被爆者の病気がうつるなどといった風評被害もあつたかもしれないと今になつて思ひます。

さていよいよ終戦となり父も朝鮮から復員して帰りました。両親は縁あつて1946年結婚しました。二人とも何も持たない全く箸一膳からのスタートだつたと、母は振り返ります。放射能の影響があるなど全く知らないまま、1947年長女、私が誕生。小瀬川の養蚕農家の納屋でした。祖父は私の誕生を目を細めて喜びいつもそばで頭を撫でていたそうです。が、ひと月後、痛々しい背中の傷を負つたままうつぶせの姿で力尽きました。医者も薬もなく、母たちはきゆうりをスライスして祖父の背中に張り付ける

のが、せめてもの看病でしたが、そのきゅうりさえ分けてくれる農家とでなく、一度は夜人目を忍んで畑にお金をおいてそつともらって帰ったことがあると聞いていました。

1948年(昭和23年)、広島市吉島町に■■■■の官舎が出来、20軒足らずだったでしょうが。両親は管理人を指名されて、入り口角が我が家となりました。4～5歳のころ私は道路側の窓枠に上がって「赤い靴」を歌うのが好きでした。その時よく水色のワンピースを着た「お姉さん」が走って通り過ぎるのを見ました。顔がケロイドで唇が顎にくっついていました。後に原爆乙女をTVで見えた時、きれいになっておられましたがあの人！と心の中で思いました。他にも足の指が脛にくっついてかかとで歩いている「お兄さん」もいました。いつも長い棒きれを杖代わりにしていました。幼稚園には防空壕があり、近づいてはいけないうちになっただけですが、子供心に暗く気味の悪いものに見えています。私の幼年時代はまだまだ原爆の傷跡が残っていたのです。

そんなある日、一台の大きな車が官舎の門に横付けされて、母と私は ABCO に連れいかれました。母が診察を受けている間に私は二人の優しいお姉さんに付き添われ、キャンディやチョコレイトをもらって得意満面でした。おしっこ、というとき当時は珍しいピカピカの水洗洋便座にささげてもらいました。私は長女で家では甘えが許されなかつたから、この赤ちゃん扱いは嬉しかったし何を言っても二人で相手をしてくれ楽しうに笑うきれいなお姉さんが大好きでした。それから何回か黒塗りのアメ車は家へ差し向けられ、私はそれを心待ちにしていました。けれどもいつのころからか母の ABCO 行きがなくなりました。遠慮がちに尋ねると、母は首を横に振りました。何とも言えない雰囲気からその理由は聞けませんでした。後にわかったことですが、あるとき ABCO の診察室で裸になるよう指示がありアメリカ人のドクターに囲まれじろろ見られて母は大変怖い思いをしたといいます。そのことを聞いた父は激怒して金輪際協力することとはならぬ、となったのです。敗戦後間もない時代に、医学的とはいえ研究材料にされて悔しかったのでしよう。

その後つぎつぎに弟たちが生まれ、小さなちやぶ台を囲んでふかしイモなど食べながら団欒をしているとき、母はよく原爆体験を語ってくれました。前出の話はすべて兄弟で、時に涙をこぼしながら聞いたものです。火傷で皮膚が垂れ下がった人の体は・・・と母はまわりを見回して「そう、こんな色！」と赤茶色のちやぶ台を指でなぞりながら言いました。私は恐ろしさに身震いして、何度平和を神様に祈ったかしれません。

平和そして核なき世界を望みます。被爆者の叫びを静かに深い心で受け止め、2度とこのような悲惨なむごいことがないよう、祈り続けたいと思います。

12歳の8月6日 (1987年 三浦幹雄) 退職

私の家は、段原大畑町(段原小学校の西隣)で、両親、祖母、弟(4歳)、妹(2歳)の6人家族でした。

昭和16年(1941年)12月8日第2次世界大戦が始まり、20年(1945年)3月10日東京大空襲、2月22日、7月10日には、呉(広島から南東約27km)に空襲が2回もありました。(呉2071人死亡、家屋13395消失)が不思議なことに軍都(軍の施設38か所)である広島には、小規模な空襲が2回(20年3月19日、4月)あっただけでした。

呉の空襲(20年6月22日、7月10日)の時は広島の上空をB29の大編隊が翼を銀色に輝かして飛んでいくのを家の屋根に上がって見たものです。呉の陣地から、高射砲を打っていました。はるか下で弾がはじけ、まるで打ち上げ花火を見ているようでした。戦争というより何かきれいなものをみているようでした。

しかしこの思いも8月6日にはすべて吹き飛んでしまいました。

8月6日、戦争とはこんなに悲惨なものか初めて知らされたのです。

私は中学1年生で、軍国主義の思想を教育され、将来は軍人としてお国のために役立って死ぬことばかりを考え、他の職業は考えなかつたし、スポーツは非国民とまで思っていた少年でした。中学生は学徒動員として、2年生以上は軍需工場へ、1年生は建物疎開(消防道路、防火地帯を作る)の労働にかりだされていきました。

私は、国泰寺町市役所南側の雑魚場町で建物取り壊し作業の学徒動員令を受けておりました。当日8月6日午前7時ごろ家族に見送られ自宅を出ました。徒歩で段原大畑町から比治山町、比治山橋を渡り現地へ行きました。途中警戒警報の発令、解除とあわただしい1日の始まりでした。現地へ午前8時ごろ到着し、間もなく召集点呼が行われることになりました。その時です。私は上着のボタンが一つとれかかっていることに気が付いたのです。“アッ、びんた”教官に殴られる恐怖感で頭の中はいっぱいになりました。ボタンは天皇陛下からの預かり物で失うことは非国民としてそしられることになるのです。「ボタンを早くつけなければ」と友人へ教官への釈明を頼み、一人で近くの防空壕へ入りました。今から思うとこのたった一つのボタンが、私の生死の分かれ目となったのです。

運命の8時15分、私はその時防空壕の中でボタンをつけておりました。突然目の前に閃光が走り(太陽の約10倍の明るさ)、爆風に吹き飛ばされ気を失いました。どれだけ時がたったか……気が付くと目の前が真っ暗で、やがて明る

くなりまりました。爆風で防空壕の奥へ吹き飛ばされました。藪の入り口は木片に覆われ、火がついてパチパチと音を立てておりました。私は「先生、先生助けて！」と何度も叫びましたが誰も来てはくれませんでした。必死で木片をはねのけ外へ出ました。すると外は想像に絶するものでした。建物はすべて倒れ、火の海となり何十名もいた同級生の姿も消えていたのです。一体何が起こったのかわかりませんでした。先生、友人の名前を何度読んでも返事一つありません。火と煙の中から“助けて！”という声が聞こえています。私は火の中をくぐり道路へ出ました。そこには身の毛がよだつようなあまりに悲惨な人々の姿に、冷水を浴びさせられたようになりました。来ているものは焼けてぼろぼろ、裸同然の姿で、木やガラスが刺さってけがをして血を流し、やけどで皮膚がずるずるにただれ、顔は腫れ髪もやけ縮れ、全身黒い灰をかぶってどす黒く、何十何百人が火と煙に追われて両手を前に同じ姿でぞろぞろ歩いています。その中で、私はただ一人、けがもせず立っていたのです。(その後、白内障、骨髄炎、右目失明、左向こう脛打撲)その人たちはなぜか比治山方面へ歩いていました。私も自然にその人たちにもまれながら歩き始めました。途中で私の名前を呼ぶ者がいました。がその者は全身やけどで皮膚は赤黒く垂れ、髪はチリチリで顔も判りませんでした。名前を聞くと小学生時代の同級生 Y 君でした。Y 君は家まで連れて行ってくれないので「我慢するのだ」といいます。そのころになる「水が飲みたい」と泣いています。ちようど比治山橋を渡ったところで、防火水槽とい、痛い」と泣いています。水が飲ませようとあたりにいっぱいやけどをした人たちの間を進み、Y 君が一人で水を飲めるよう立たせました。が、いつまでも同じ姿勢で屈んでいるので、「Y 君」と肩をゆすると肩の皮膚がむけ私の手につききました。もう死んでいたのです。私は泣きながら何度も名前を呼びましたが、返事はありませんでした。その時兵隊さんが来て「もう死んでいる。放っておけ」といきました。私はしばらく放心状態で座り込んでいましたが、周囲に火が迫ってきたのでそこを逃げることにしました。その時、家の中から女の人の声が「助けて！」というのを聞こえ、見ると梁の下敷きとなっています。私は「誰か来て」と叫ぶと男の人が近寄ってきたので二人で助けに行きました。が 12 歳の男児と男一人では梁はあまりにも大きすぎたのです。そのうちにパチパチと火が近づき、とうとうその家にも火がついたのです。「もうだめだ、逃げよう」と男の人が言いましたが、女の人は泣きながらありったけの声で「助けて！」と叫んで！。私も男の人と一緒に逃げました。きつとその人は生きながら焼け死んだのでしょうか…。それからどう逃げたのか？気が付くと比治山の中腹の防空壕の前でした。あたりには火傷の人々が無数にいました。山から見ると見

渡す限り火の海でした。その時黒い雨が降り出したのであわてて防空壕の中に入りました。中には人が2〜3人いたようですその人たちに「段原小学校付近は大丈夫か？」と聞くともうどうにもならんといいます。私は家族のことが心配でたまりませんでした。雨が止んだので、我が家へ行くこととし一人で比治山の壕を後に電車通りを歩いて比治山派出所まで行きました。途中あちこちで火傷の人、怪我をして血を流している人、死んだ人を多く見ました。自宅付近はすべて火の中でした。人々に聞くと「もう行くことはできない」とのことです。ふと我に返ると周囲はやけどやけがを負った人々がいっぱい、もう助けを呼ぶ力もなく集団でうずくまっています。そのうち暗くなってきたので、路上にあった布団を持ち派出所裏の防空壕へ入りました。何人が一緒に寝ましたが、一晩中うめき声にして寝た気がせず、翌朝何人が息絶えておりました。私は死体と一緒に寝ていたのです。何時ごろか、握り飯の配給があり、歩けるものは集まって食べましたが、私は一口食べて吐き出し、それからは一口も食べられませんでした。火災、煙、死体、怪我のにおいで体が受け付けなかつたのでしょう。(結果として放射能障害から助かったのか) それで一人で広島駅へ行くこととしました。そのころになると火はほとんど消えていました。両親から何かあれば郷里の三次へ行くよう言われたことを思い出したのです。途中いたるところでまっ黒くまるで炭木のような死体が転がり、死臭の中をやっと広島駅に着きました。が、駅舎も焼け、汽車もないことを人から聞き、止む無く線路を歩き一歩でも三次へ近づくことを考えました。その時です。近くの黒い塊に気が付き、見ると女の人が子供を抱いたまま死んでいたのです。どこから逃げてきた人か知られませんがしっかりと子供を抱いた姿は、今でも私の目の中に残っています。近くに噴水があり、戦後ずいぶん経った今でも噴水をみると辛い心がいつぱいになります。

広島駅から線路づたいに三次方面へ歩き出しました。線路上には、焼け出された人々が、木片やガラスの刺さったまま助け合いながらとぼとぼと歩いており、力尽きて座り込んでいる人も多くいて、異様な状況でした。幸いなことに矢賀駅(広島駅から2.2km)から汽車が出ており乗ることが出来ました。車中でも何人が息絶え、うめき声、鳴き声、「痛いよう!」「水を!」という怒りの声が聞こえておりました。郷里の前に亡くなった人はどんなにか無念でしたでしょう。眼を開けてみることはできない状況でした。

私の家族は六日夜は広島駅北側の東練兵場で過ごし、翌々日三次へ帰ってきました。全員無傷でしたが、20年8月末に母が、同年11月末祖母が、そして2年後には父がいなくなって、兄弟3人残されてしまいました。私の人生は「それから」弟と妹が支え、生きるのがやっとの戦後でした。

数十年たった今も、戦争そして原爆の傷跡は私の心と体に残っています。同

期生のほとんどが即死、代わりになった友人、途中で死んだ友、助けを求めた女の人、そして家族……。夏になると、子供を抱いて死んでいたあの黒焦げの母親のあたりに夾竹桃が赤い花を咲かせます。それを見るとき、私は行きたくても生きれなかつたすべての同級生を思います。自分だけが生き残った申し訳なさと張り裂けそうになります。

8月6日。この日は一生忘れることはできません。

戦争は加害者も被害者もない、
大人も子供も同じ悲惨を味わう、
戦争は人間が侵す最大の破壊、

今日の手記を大切に、忘れない、これが尊い犠牲者に対する残された者の務め
命を大切に、今日の命は10代さかのぼるだけでも1025人の父母が必要、
思いやり、いたわりが平和の原点、
戦争はいけない、兵士だけでなく残された人も犠牲となる。

核兵器の使用は地球を滅ぼす、
平和が一番、

核兵器は絶対悪、
生きることの素晴らしさ、
人や自分を愛すること。